

芥川龍之介「寒さ」論

——機械的行為に表れる人間らしさ——

田 沼 伊 都 子

はじめに

芥川龍之介作品「寒さ」は、一九二四（大正一三）年四月一日発行の『改造』第十六巻第四号に掲載され、後に『黄雀風』および『芥川龍之介集』に所収された。

この作品は、作家兼教師・堀川保吉を主人公とした所謂「保吉もの」の一篇である。「保吉もの」は従来、芥川が歴史小説を中心とする作風から現代小説へと移行していく過渡期の作品群として語られることや、主人公である保吉を、執筆の傍ら海軍機関学校の英語教師を務めた作家・芥川自身と重ねて読む私小説の一種と見做されることが多く、個々の作品について論じられることは極めて稀である。

「寒さ」の数少ない作品論としては、国木田独歩の「窮死」の影響について考察した平岡敏夫氏の「「寒さ」と「窮死」^①」や、保吉を小説の視点人物とすることで、物語世界を見る者の姿勢の変化を描いた作品として捉えた長沼光彦氏の「芥川龍之介「寒さ」の空間」^②が挙げられる。だが前者は比較研究が主となっているため、個別の作品論とは言い切れない。

い。一方後者は作品を単独で論じ、熱と寒さの対比に注目している点で評価できるが、保吉のモデルを芥川とする説から脱しきれていない。

「保吉もの」の掲載時期は、全十作品のうち八作品がこの「寒さ」の同年と前年に集中している。同時期に発表された「文章」^③では、作中で死を扱う点が共通しているものの、「文章」が暗澹とした結末を迎えるのに対し、「寒さ」の終結部には明るさが垣間見えるなど、その違いは顕著である。これらのことから、作品を一つの独立した小説として扱い、私小説的読解から離れた上でより深く考察する必要性を感じた。本論では作品研究の可能性を広げるべく、独自の解釈を試みたい。

伝熱作用

保吉はある雪上りの午前、物理の教室室で室内に漂う寒さと戦うストーブの火を眺め、地球の外の宇宙的寒冷を想像しながら、赤々と熱した石炭に同情に近いものを感じていた。すると同僚の理学士・宮本が出し抜けに「堀川君。君は女も物体だと云ふことを知ってるかい？」と尋ねる。宮本は伝熱作用の法則のように、人間の恋愛感情もより熱を上げて

いる男から女へ、その熱が等しくなるまで移動を続けるという持論を、黒板に公式を書きながら力説し始める。これは一九世紀の自然科学研究により説明されつつあった、熱力学の理論(1)によるものであり、理学士ならではの発想である。

だが、同僚の理学士・長谷川とその許婚の例を挙げて熱心に語る宮本の傍らで、実際そんな公式があれば世の中楽だと、保吉は興味なさそうにぼんやり窓の外を眺めて不興を買う。保吉が火を擬人化し、健気に燃え続ける様子に同情に似た感情を抱くのに対し、宮本が人間を物体と捉え、他の物質同様、熱伝導の法則に当て嵌まると力説する様子は対照的である。宮本は自身の論に無関心な保吉を、物理素人の文学者と切り捨てる。二者の根本的な考え方の相違が示されるこの件は注目すべき箇所である。話が保吉の本の売れ行きに及ぶと、保吉は「作者と読者の間には伝熱作用も起こらないやうだ。」と自虐的に語ることで、宮本の持論を終始まともに取り合おうとしない。やがて長谷川の新居に話が及ぶと、保吉の靴がストーブに触れて焦げ、臭気と共に水蒸気が立ち昇る。宮本はそれを見て、「それも君、やつぱり伝熱作用だよ。」と保吉へにやりと笑いかける。

宮本は人間を物質と見做しているが、保吉はそれに同調しない。宮本の説によれば、人間も物質と同様に熱を持つことから、伝熱作用の法則が適用できるということである。これはブラックやカルノーらが提唱した熱力学の理論に因るものだが、保吉が著書の売れ行きについて「作者と読者との間には伝熱作用も起こらないやうだ。」と語るように、人間の感情には著しい個体差があり、必ずしも物質と同様の作用は期待できないため、宮本の説に同意しないのである。こうした物理的要素以外の影響を無視して、人間を法則に当て嵌めようとする宮本の論が聊か強引

なことは否めない。

これに対し保吉は、物質であるストーブの火を「息をするやう」とか「室内に漂ふ寒さと戦ひつづけてゐる」と擬人化し、石炭には同情に近いものを感じている。これを宮本風に表すならば、「ストオヴの火は、室内に漂う寒さと等しくなるまで熱を移動し続けている」とでも言えそうだが、保吉はこの石炭から放たれる火を見て、物質でありながらも、あたかも寒さと戦っているかのようにひたすら燃え続ける様子を人間のようを感じ取ったのである。それは「宇宙的寒冷」という強大な敵に立ち向かう小さな火を、大勢の読者の評価と日夜戦い続けている自身と重ねているためとも考えられる。

人間と物質に対する二者の考え方の違いには、理学士と文学者という個々の立場の違いによるものも大きい。自然現象を原理や法則として数学的に解き明かす、体系的理論を是とする宮本に対し、書物を通して西欧の思想や芸術を享受してきた保吉は、聊か観念的であり、理想主義的なロマンティストと言える。この相違は後に、作品を読む上で重要な意味を持つてくる。

轢死

数日後、保吉は下り列車に乗るために麦畑の沿道を歩いていた。そこで響くかすかな物音は、まるで誰かが麦畑の中を歩く音のように聞こえるが、実は打ち返された土の下にある霜柱の自ずから崩れる音らしかった。ここで霜柱が発する音は、人間の物音に酷似しているながらも、あくまで霜柱の音として認識されており、数日前に保吉が同情を寄せたストーブの石炭のように擬人化はされない。この二つの違いは何に起因するの

か、作品を読み進めていく中で考えていきたい。

歩みを進めていくと、保吉の傍らを八時の上り列車が通り過ぎる。保吉は自身が乗車する列車の到着時刻を計算し、乗り遅れる心配のないことを思いながら「朝日」に火を点け、気楽に駅へと向かっていく。駅の手前の踏切まで来ると人だかりができていて、側にいた肉屋の小僧によれば、先の上り列車に轢かれそうになった本屋の娘を助けようとして、踏切り番が犠牲になったという。死骸は踏切り番の小屋の前で皿をかけられ、両足の靴だけ見える状態で寝かせてある。保吉はその姿に、嫌悪と好奇心の両方を感じる。

死骸を移動させた鉄道工夫たちは、踏切のこちら側のシグナルの柱の下で小さい焚火を囲み、うち一人は半ズボンの尻を炙っている。黄色い炎を上げた焚火は光も煙も放たず、それだけに保吉の目には如何にも寒そうに映った。数日前に見たストーブの炎も同じく黄色く燃え上がっていたが、時折どす黒い灰燼に沈んだりしながら燃え続け、終いには保吉の靴を焦がして水蒸気を昇らせるなど、まるで宇宙的寒冷に抗うように寒さと戦っていた。だが鉄道工夫たちの囲む焚火は単に黄色い炎を上げているだけで、冷気と戦っているようには見えない。踏切り番が轢死したことにより、鉄道工夫たちも焚火も、まるで氣力を失ってしまったかのようなのである。炎が燃えているにも拘らず、どことなく寒そうに感じられるのはこのためでもあろう。

この焚火が、同じ炎でありながらもストーブの炎と違い、擬人化されていないことについても考えたい。保吉は冒頭のストーブの炎に対する描写から、単独で周囲に抗い、戦っているように見える物質を擬人化していると考えられる。そして焚火との比較から推測すると、色だけでなく光や煙などで視覚に訴える熱源にのみ、熱の存在を感じ取っているよ

うである。先の霜柱は人間の足音に似た音を発しながらも、熱に抵抗することなく簡単に負け、自ずから崩壊しているため、保吉がそこに人間的なものや熱を感得することはなく、あくまで霜柱という物質が伝熱作用で壊れる物理現象として受け止められていたのである。また霜柱は、地中の水分が複数の柱状に固まったものであるため、単独という条件からも外れている。

保吉は踏切に差し掛かり、踏切り番の轢かれた線路を目の当たりにする。そこで二三分前の悲劇を物語るような血を見て、すぐに視線を逸らす。時既に遅く、冷ややかに光った鉄の面にどろりと赤いものの溜まっている光景が、鮮やかに心へ焼きついてしまう。しかもその血は線路上から薄々と水蒸気さえ昇らせているのである。

十分後、保吉はプラットホームの上で、先ほど目にした血から立ち昇る水蒸気の光景が目には浮かび、落ち着かない歩みを続けながら、数日前の電熱作用の話を思い出す。

ここでこの轢死者の赤い血と、線路の上に立ち昇るその煙について考えたい。水蒸気が昇ることからも、実際にこの血がまだ熱を帯びていることは明らかだが、保吉はこの血に生命の熱が宿しているとしながらも、既に宮本の唱える法則通り、もはや人間ではなく物質として、冷たいレールに互いの温度が等しくなるまで熱を移し続けていることを認識するのである。そしてこうなってしまうばもはや生命は誰のものでも関係なく、同じように刻薄に伝わりとされている。善行により殉死した踏切り番の生命を宿した血も悪人の血も、生命を失った後では唯の物質として、同じ作用をするのみなのである。このことに納得できない保吉は、孝子であろうと節婦であろうと、非業の死を遂げることもあると、自身を説得しようとするが徒勞に終わる。職務に殉じて轢死体となってしまう踏

切り番が、行いの善悪とは無関係に生命を失ったことで、物質と同等になってしまったのである。炎を擬人化するロマンティストの保吉にとって、死体から流れ出た血が、炎のように動いたりするようなことがあれば、多少は救われもしようが、科学的な法則だけでは割り切れない模瑚たる存在だった人間が、職に殉じて生命を絶たれたことで、取替え可能な物質のひとつに変化してしまった事実、理論的には理解できても、心情的には受け止め難いのである。

ではこの轢死事故について、もう一度整理してみよう。踏切り番は轢かれそうになった少女を救おうと、果敢にも列車と戦って負け、轢死した。少女を助けようとしたこの行為は、踏切り番としての職務を遂行したことに他ならず、定められた規則に正しく従ったものである。だがこの身を挺した救出劇は、あくまでも非常事態に遭遇した踏切り番の咄嗟の行為の結果であり、自身の命を犠牲にしても少女を助けたいという強い意思が働いていたとは考え難い。

この踏切り番には、前年に「保吉の手帳から」で描かれた大浦と共通する点がある。守衛である大浦は、泥棒を捕り逃して海に落ちた。大浦は守衛としての役割を果たそうとして仕損じたので、職務の遂行という点では、命を犠牲にして役割を全うした踏切り番と同様である。だが一見すると同じに映るこの二人の在り方は、実のところ対照的である。泥棒と争った大浦は、自らの意思で職務以上の格闘をした結果、海に落ちたのである。これに対し、踏切り番は己の意思で命を落としたというよりも、ほぼ無意識裡に体を張って助けたと考えられるため、二者間には本質的な違いが存在するのである。「保吉の手帳から」では職分を一步踏み超えた働きをすることによって、俗世間を超越する保吉と大浦の姿が描かれていた。だがこの作品では、職分を超えた行い——本人の意思

によるがむしやらな格闘——は描かれていない。ここでは寧ろ本人の意思を超えた行い——職分を忠実に遂行する姿——こそが重要なのである。規則に従って忠実に職務を果たす行為は機械的であり、その姿は一見すると科学的な法則に従う物質のようである。だが踏切り番の機械的な職務遂行について考えを巡らすと、その中に彼の人間らしさを見出すことができる。機械とは決められた動きを正確に行うものである。だがその正確さは、予め想定された動きのみにしか対応できないことを意味する。対して人間は、想定外の事態にも柔軟に対応することが可能である。踏切の中に人を入れないことを機械の仕事とするならば、踏切りの中に入ってしまった少女を助けた踏切り番の殉職は、職務を忠実に遂行する中で機械では対応できない、機械以上のことをした結果の死であるといえる。機械には不可能なこの咄嗟の行為を人間的と捉えることはできまいか。

焚火と手袋

保吉がレールの上の血を思い出して苦悩している傍らで、プラットホームの人々は幸福そうである。保吉は彼らや大声で話す海軍将校たちに苛立ちを覚え、その場を離れるために二本目の「朝日」に火をつけながらプラットホームの先へ歩いていく。すると保吉はここで再び、二三町先に件の踏切りを見とめることになる。踏切りの両脇の人だかりは既にあらかた散じ、今は先ほどの鉄道工夫たちの焚火が一点、黄色い炎を動かすのみである。ここで保吉は、少し前に寒そうだと感じたこの焚火に、冒頭のストーブの炎同様、同情に似たものを感じ始める。

ではこの炎に対し、なぜ保吉の心境に変化が生じたのか考えたい。先

述の通り、初めにこの焚火を見た時には、光も煙も放っておらず、保吉の目にはいかにも寒そうに映った。この時、焚火は二三人の鉄道工夫に囲まれ、うち一人は半ズボンの尻を炙っていたが、踏切り番が轢死した直後で、皆が意気消沈していたこともあり、炎は黄色く燃え続けながらも覇気に欠け、どこか寒々しく感じられた。対してプラットホームから見た焚火は、既に周囲に人影もなく、ぼつんと取り残された状態にありながらも、健気に黄色い炎を動かし続けていたのである。保吉はこれまで、周囲に抗い単独で戦っているように見える物質に人間的なものを感じていた。それゆえ、誰にも顧みられることのない状態にありながら、寒さに抗って燃え続けるこの焚火に同情を寄せているのである。客観的に考えれば、事故の直後もプラットホームから眺めた時も、焚火は等しく燃え続けており、特段変化は見られないはずである。だが保吉は、たった一つ取り残されながらも燃え続け、空気を暖めるという職務をひたすら遂行している後者にこそ人間性を見出すのである。この職分を忠実に果たすという点においては、身を挺して列車から少女を守った先の踏切り番とこの焚火には通ずるものがある。

最後に保吉は翻って、もと来た人ごみの中へ帰り始める。そこでふと、赤革の手袋を一つ落としたことに気づく。二本目の「朝日」に火をつける時に片方だけ脱いだのだ。振り返ると、手袋は手のひらを上にしてプラットホームの先に転がっている。その姿はまるで、無言のまま彼を呼び止めているように感じられた。

手袋の役割は人の手を温めることに他ならない。その手袋が持ち主を呼び止めているというこはつまり、「持ち主の手を温める役割を果たしたい」と訴えているのである。

この作品では、ストーブの火、焚火、そして最後に手袋が擬人化され

る。それは保吉がこれらの物質に人間的なものを見出したからに他ならない。ストーブの火はまるで生きていくかのよう燃えては沈み、室内に漂う寒さと戦っているようであり、また「宇宙的寒冷」をも想起させた。焚火は人だかりが散じ、ただ一つ取り残された状態になりながらも、周囲の空気を暖めるために黄色い炎を動かしながら燃え続けていた。そして手袋も、片方だけ取り残されながらも、自身の職務を果たすために、持ち主を呼び止めるように待ち続けているのである。

このように擬人化の推移を見てくると、徐々にその条件に変化が生じていることが確認できる。ストーブの火については、先述の条件のうち、強大なものと戦っている（ように見える）という要素が重要だった。だが焚火の件では戦いの比重が減り、代わって単独で（人に顧みられなくても）職務を遂行することへと比重が傾く。そして手袋に至っては、戦いの要素はもはや消失し、単独で（人に顧みられなくても）健気に職務を遂行しようとするのみが、条件として残っているのである。

冒頭で、保吉はストーブの火が孤軍奮闘する様を、大勢の読者と戦う自身と重ねているという仮説を唱えたが、この説に則れば、保吉は大勢の読者と激しく戦うところから、一人黙々と小説を書く（職務を遂行する）ところへと徐々に気持ち傾いていき、最終的には人に評価されずとも、小説を書き続ける（自身の職分を果たす）ことこそ重要だと気づいたといえる。

ここで気になるのは、物質が人間に譬えられ人格を与えられているのに対し、人間であるはずの踏切り番には、固有名詞が与えられていないことである。それは保吉が宮本のように、この踏切り番を物質と見做していたためではない。踏切り番が職に殉じたのは、機械的に職務を全うした結果であった。だが保吉はこの不幸な殉死を目にしたことによって、

今や物質と化した踏切り番にも、かつては一人の人間としての生が存在していたことを、却って強く認識するのである。そしてこの踏切り番の生真面目で機械的な行為に、寧ろ人間らしさを感じるのである。ここでは敢えて固有名詞を伏せることで、この逆説的な論理がより一層際立つのである。

物質に人間らしさを感じる保吉の描写から始まった本作品は、他者と戦いを想起させる物質から、己の職務を淡々と遂行する物質へと擬人化の対象を移したことや、機械的に職務を遂行することが、人間にしかできない行為を引き起こすという逆説的な事象を通して、新たな人間らしさを発見したところで締め括られるのである。

おわりに

この物語は、保吉が取り残された赤革の手袋の心を感じ、また薄ら寒い世界の中にも、いつか温かい日の光のほそぼそとさして来ることを感じるところで幕となる。役割を果たそうと保吉を呼び止める手袋の健気な姿を見て、読者と戦うのではなく、小説を書くという職務を全うすることの大切さに気づくことで、作家としての気負いがなくなった保吉の、安堵の気持ちが反映された明るい幕引きである。同時期に発表された「文章」では、心血を注いだ小説が評価されず、適当に書いた弔辞が絶賛されたことで、自身と他者との文章観の齟齬に気づき、心細さを感じたまま終幕となる。その後「少年」で描かれた「何一つ碌にわからないのは寧ろ一生の幸福かも知れない」という思想にも通じる作品である。いずれも作家としての在り方を考える保吉の姿が描かれた作品といえるが、明るい結末と暗い結末がほぼ同時期に描かれていることは興味深い。

この時期の「保吉もの」は将来に思いを馳せるところで幕切れとなる作品が多く、仄明るい未来と薄暗い行末という異なる二つの将来像が作品ごとに用意されており、保吉の不安定な心情が表されている。後に執筆される「十円札」や「早春」において、保吉の将来についての言及はないが、この二作は単行本未収録となっている。本論は「寒さ」の考察のみに止めるが、未来への不安を曖昧に描いた同時期の作品群については、今後も理解を深めていきたい。

注

- (1) 平岡敏夫「芥川龍之介と国木田独歩 二 「寒さ」と「窮死」」(芥川龍之介、大修館書店、昭和57年11月)
- (2) 長沼光彦「芥川龍之介「寒さ」の空間」(京都ノートルダム女子大学研究紀要)第38号、京都ノートルダム女子大学、平成20年3月)
- (3) 一九二四(大正一三)年四月一日発行「女性」第五巻第四号(四月特別号)掲載。のち「黄雀風」所収。
- (4) 塩川久男「ルネサンスから19世紀末までの科学・技術の歩み」(学文社、平成3年)157-162頁。
- (5) 一九二三(大正一二)年五月一日発行「改造」第五巻第五号に「保吉の手帳」の題で掲載。のち「黄雀風」所収にあたり改題。
- (6) 拙稿「芥川龍之介「保吉の手帳から」論——変化する俗世間との関わり方——」(言語・文学研究論集)第13号、白百合女子大学言語・文学研究センター、平成25年3月)参照。
- (7) 一九二四(大正一三)年四月一日発行「中央公論」第三九年第四号(春季大付録号)に「一 クリスマス」「二 道の上の秘密」「三 死」掲載。同年五月一日発行の同誌第三九年第五号に「少年続編」として「一 海」「二 幻燈」「三 お母さん」掲載。「黄雀風」所収にあたり、「少年」と「少年続編」の章番号を「四」→「六」に改めたものを併せて一つの作品とした。

*本稿での「寒さ」の引用はすべて『芥川龍之介全集 第十一卷』（岩波書店、平成8年）に拠った。